



アフリカの死 小川国夫



アフリカの死

小川国夫 著

© 1980 Kunio OGAWA

一九八〇年一月二五日 第一刷印刷
一九八〇年二月一〇日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 小川国夫

装幀者 司 修

発行者 堀内末男

発行所 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇

郵便番号 一〇〇一

電話〇三・三三〇・六三六二(出版部)

二三・八二七八一(販売部)

印刷所 図書印刷株式会社

著者との誤解に基き検印は廃止します
万一、落丁・乱丁の本の場合はお取り替えます

Printed in Japan

0093-772240-3041

目次

エル・キーフの傷

5

甘い砂

93

ゲヘナ港

141

後記

269

ア フ リ カ の 死

エル・キーフの傷

チュニス

あの町の側面は広い階段になっている。それもローマ時代の遺跡だという。石は揃っていて大きく、男の足でようよう登れるほどだ。戦争を考えて造ったものだろうか。普通の人々はそれを使わなくて、端にとりつけられたもっと小刻みの階段を伝わって上下している。

オマールが胸を擦りそうな大階段を駆け登ってくる。顎が膝にぶつかりそうになる。痛みはどこへ行ったのか、忘れているのだろうか。それなら結構だ。しかし俺は逃げて行きはしない、ずっとここにいろよ。

私たちは、禱いて祈る人々を見下ろしている。大階段はメッカの方向に空が展けているから、一日の祈りにはうってつけなのだ。年寄だけではなく、青年も——オマールの年ごろの少年も

祈っている。彼らを覆った灰色の影は、せり出して行き、平原にエル・キーフの町の輪郭を印している。

エル・ハジャ

村の門を出て、オマールのいう通りに走りながら、姉弟がいそいそとしているのを感じた。二人の体にはもう音楽が湧いている気配だった。静かさの中に聞えないリズムが籠っていた。アフリカへ着いてから特に、自分が孤独であることにも気づかないで過ごしてきたが、矢張り孤独だったんだ、今になって初めて、アフリカ人が寄り添ってきた、と私は思った。無頼な気分が脹んだ。行手の闇が艶を帯び、華やいで行った。

なだらかな斜面の中腹を、水平に廻りながら走っていた。左手は大きな夜で、ヘッドライトが宙に動くだけだった。低く平原が拡がっているのに違いなかった。いつの間にか斜面を登りつめていた。車を片寄せて置くと、私たちは歩いた。かなり剣呑な道だったが、姉弟は平気で行き、オマールが懐中電燈で、あとに続く私の足許を照らしてくれた。徐々にな下って行く尾根道で、白い石が照らし出され、時々、うずくまった獣のような灌木に通せんぼされた。

尾根が終り平らな所に出ると、灌木に一頭の馬と四頭の驢馬がつながれていた。驢馬の毛並みは光を吸いとっていたが、馬は艶々と光った。驢馬はまるで剝製だ。馬だけが頭をあげ、蹄で石を弾きながら動いた。かたわらに漆喰の建物があったので、目的の場所はそこかと思つたが、そうではなく、その箱の上に半球を乗せた形の建物はモスクだった。

尾根道はもつと悪くなった。体を硬くしながら辿って行くと、また高台があり、低い小屋があった。村の家のように日干し煉瓦の作りで、一軒だけ仲間からはぐれた感じだった。羊飼いの宿泊場所かもしれない、と最初は思ったが、意外に広かった。何をする場所なのだろう……。小さな中庭もあつて、そこへ入る木戸をオマールが開けると、彼の足許をすり抜けて、大きな犬が出てきた。いきなり私に狙いをつけ、青い闇の底を流れるように近寄つてきた。オマールにも危険が解つたのだ。素速く足をあげて、犬の肩のあたりを蹴った。犬は私のふくらはぎを擦り、地面を搔いて跳びのいた。懐中電燈の光の輪の中で、オパールのように眼を光らせていた。オマールが短く脅しつけると、眼の光は消え、のろろと中庭へ戻って行く影に変わった。中庭に面したドアから光がこぼれていた。ティティが開けると、中に五人の男と一人の女が車座になっていた。赤い光のせいで、その部屋は充血している感じだった。肺の内側のようだな、と私は思った。彼らは鳴りをひそめ、そのせいで余計耀きを増した眼で、私を見ていた。見られていることを忘れた一途な視線と押し合うようにして、私は踏みこみ、甘い麻の煙の中

を横切って、奥まった席に坐った。ティティが小さなマットをそこに置いて呼んだからだ。オマールは私を紹介していた。言いくそくに私の名前を告げると、すぐにそれを復唱する青年もあった。こっちに眼は据えたままで、あやふやな発音と実物を照合しているかのようだった。少し馴れてくると、私を正視しているのは男たちで、女は盗み見ているのが判った。もつともティティ以外に女は一人しかいなかった。下唇から顎にかけて垂直に藍の入墨を刺している女だ。

関心はオマールの怪我に移り、質問があった。オマールは、なんでもない、とでも応えていたのだろうが、板を当て繻帯で巻いた左手をかざして、笑いながら、浮標^{フイタ}のように動かしてみせた。

オマールの伯父はハムザといい、座長格だった。一個しかないコップに壘から赤葡萄酒を注ぎ、順次一人一人に手渡すのだ。オマールの番になると、ハムザはコップを出したり引っこめたりしてからかった。

楽器は胡弓とゲンブリだった。胡弓は鼓膜に染みついてきた。ゲンブリは空気を切り刻むように鳴った。まずハムザが体を揺すり始めた。すぐにリズムが体に取り憑き、筋肉が柔かく波打って、とめどもなかった。やがて男たち全員の筋肉が波立ち、それから女たちの腰が浮き上がった。

ハムザが肉のゆらぎの中心だった。彼はランニングシャツを着ていた。褐色の脂ぎった皮膚で、ランプの光を細波にしていた。

私はこの国の人が年より老けて見えることを知ってはいたが、ハムザは四十五には見えた。精悍で、賢そうだった。眼は、オマールたちとは人種が違うと思えるほど、小さかった。落ち窪んでいて、深い割れ目にしか見えない瞬間もあったが、その奥が時々、その場にそぐわない険しい光り方をする瞬間もあった。眼の光は笑顔とはちぐはぐだった。彼の体は依然一個の楽器で、不随意筋まで柔かに波打ってはいたが、私には、その眼のせいだ、この男の心は醒めていると思えて仕方なかった。すると私の気持まで音楽から離れて行き、何か解らない彼の本当の関心事を想像してしまうのだ。彼が何も考えていないとは思えない。そんなふうには思えない。自分の想いは、闇にいたずらに流れるヘッドライトのようなものだが、その行手には深い世界があることは確かだ。

屈強な若者が立って、眼と歯をきらめかしながら踊りだした。この国の男の踊りは、本来は武道だったのだそうだが、その若者——ラムダンも、ほとんど息も弾ませないで、二十分ぐらい立ち廻りをやって見せた。跳躍すると、胸まで天井のあたりの闇を浴び、ランプの近くへ落ちてきて、土間に膝を突き、もう一度跳ねて立ち上がった。時々関節が鳴り、終りに近づくと、息づかいが聞えてはきたが、調子づいた体は、始めのころよりもよく動いていたようだ。音楽

に乗っていないわけではなかったが、それと融け合っていたのでもない。苦行者めいた、孤独な意志が、場の雰囲気とはかけ離れて感じられた。

ラムダンが踊り終ると、ハムザがコップに葡萄酒を注いだ。しかしハムザは、コップを彼に渡さないで、私に廻してよこした。

ラムダンはまだ肩で息をしながら、どうしようもなく私の手の中のコップを見ていた。視線は斜めになり、下唇は心持ち突きでていた。私はコップを彼に差し出した。彼は、ハムザを盗み見てから、それを受け取った。

女は四十ぐらいに見え、私は、ハムザの妻ではないかと思った。顎の入墨も、やがて物珍しいものとは意識しなくなっていた。彼女が立って、歌いながら踊り、ティティも組みになった。二人は声を張り上げ、踊りまくった。すぐにティティが競り勝った恰好になり、年輩の女はゆるやかにうねりながら手を叩くだけになった。

ティティが変化して行くのに、息を呑んだ。別人になるまで登りつめるのか……。声はサイレンのようになって頼えた。歌と交互に、踊りはその都度激しさを増した。腰は鰐が泳ぐ恰好になったり、おこりに罹ったように痙攣したりした。しかも彼女は無邪気に笑っている。夢の中でしか見るこのできない女のようなのだ。

やがてティティはハムザの横に坐り、二人の筋肉は楽器と連動していた。磨いたマホガニー

のようなハムザの皮膚と、ティティの杏色の皮膚がかけ合いをやっていた。ハムザはしょっちゅう金歯を出して笑い、ティティも時々白い歯を出した。

零時を廻っていた。もう眠っている者もあった。その男は騒ぎに身をまかせているうちに、いつか幸福そうな寝顔に変わっていたのだ。音楽が止むと、彼のいびきが聞えた。ハムザはその男の口鬚を掴み、歌を口ずさみながら揺すった。

みんな帰り支度を始めていた。葡萄酒は、五、六本しか空けなかったとはいえ、だれも酔っている様子はなかった。宴が果てたというより、スポーツの練習が終ったとでもいった空気がだった。もう別の時間へ入ったのだ。私だって、興奮が残っていても不思議ではなかったのに、それも拭われていた。彼らの潔い気分に影響されたのだ。

——車で運ぼうか、と私はいった。

——いいんですよ、一人残らず驢馬や馬で来ていますから、とオマールはいった。

——期待がかなえられたな。また呼んでくれよ。

——ここが気に入ってくれたみたいですね。今夜は泊って行きませんか。

——犬がいるな。

——犬ですか、おとなしくなっていますよ、来てみてください、とオマールはいい、入口の戸を開けた。

私もそっちへ行くと、黒犬が寄ってきて、オマールの手を舐め、怪我した腕に跳びつきそうにした。彼が身を躲した。私が撫でると、犬はだんだん頭を下げ、満ち足りて唸った。まだ若いらしかった。私はしゃがんで、犬の頸をかかえながら、連中の出て行くのを見送った。初対面の時あれほど私を見つめた彼らだったが、帰る時には、通行人のように私のかたわらを過ぎて行つた。もう慣れてしまったということなのだろうか、それとも、引揚げることに気を奪われていたからだろうか。背の高い影が次々と、無言で赤っぽい光をかすめて行つた。

——痛まないか、と私はオマールに聞いた。

——痛くなってきそうです。なんだか重苦しい。そのうちに、噛みつくでしょう。

——泣かないようにしてくれ。

——泣いたことはありません。仕方ありませんよ。そのことより、泊って行ってください。

オマールはティティを呼び何かいっていた。

——おやすみなさい、とティティがいった。

連中が立ち去るとすぐに、遠い雷が光り、峻しい崖のような雲の下に、尾根づたいに歩いて行く面々がくまなく見えた。ゲンブリの竿を握ってハムザが歩いていて、そのわきをティティが小走りについて行く。次の稲妻の瞬間には、モスクのかたわらで、ティティはハムザと一緒に馬に乗っていた。しばらく間をおいて次の放電があったが、その時には人っ子一人見えな